

夏目漱石の小説にみる女中像

— 『吾輩は猫である』『坊っちゃん』を中心にして—

The image of domestic help as seen in the novels of Natsume Soseki

With a focus on *I am a Cat* and *Botchan*

清 水 美知子*

Michiko SHIMIZU

Abstract

This paper examines the image of domestic help among the urban middle class as seen in two typical novels of Natsume Soseki's early period, *I am a Cat* (1905-06) and *Botchan* (1906). The term used in both of these works is *gejo* (maidservant), not *jochu* (domestic help).

Osan, the maidservant who appears in *I am a Cat*, is depicted as an unthinking, violent type. In contrast, Kiyō, the maidservant seen in *Botchan*, is depicted as a faithful servant who loved her master blindly. While at first glance these appear to be contrasting depictions, each is a typical example of the image of domestic help at that time. Another commonality between these two works is the fact that in each case the maidservant's employer, although highly educated, lives a life of a white-collar worker that could hardly be described as wealthy.

キーワード：女中，小説，夏目漱石，『吾輩は猫である』，『坊っちゃん』

I はじめに

近代日本の文学作品には、〈女中〉がひんばんに登場する。幸田露伴、森鷗外、夏目漱石、谷崎潤一郎など、“文豪”と呼ばれる人を思いつくままにあげても、小説家は女中を描いている。

ここで女中というのは、10代半ばから老年にいたる主に独身の女性で、原則として住み込みで他家の家事雑用にたずさわる家事使用人の総称である。女中は住み込み奉公人の一種。他家の奥深くに入り、もっぱら家庭生活を支えるのが女中の仕事である。女中となるのは若い女性が多かったが、既婚で夫と死別したなどの理由から働き続ける人もみられた。

〈女中〉という言葉には本来、座敷方の「上(かみ)女中」と台所方の「下(しも)女中」の区別があった。〈女中〉の名称は主に、江戸時代における将軍家や大名家の「奥女中」の伝統を受け継ぐ上仕えの女性(上女中)に対して用いられ、炊事や清掃を務める「下女(げじょ)」(下女中)の上層に位置づけられた。一般の武家や富裕な町人の家庭でも、上女中と下女中の区別が見

* 関西国際大学人間科学部

られた。

明治期に入ってから、上流階級においては上女中と下女中の伝統は残った。しかし、家事使用人の雇用が中流階級に広まるにつれて、上下の区別が曖昧になる。中流階級でも下層になると、家事使用人を雇うといっても一人かせいぜい二人。こうした家庭では、座敷方/台所方というように仕事の種類や内容を定めることがむずかしかった。家事使用人の多くが台所まわりの雑用など下女中の仕事を担当したことから、明治半ばには、〈下女〉が女性家事使用人の代名詞となった。¹⁾

明治時代のジャーナリスト横山源之助は1898(明治31)年、中流階級における女中雇用の広まりについて次のように報じている。

中等社会の家庭に一階級あり、下女と言へる者はなり、即ち中産以上の家庭には地方と都会の区別なく商家と農家と若くは官吏の家庭とを問はず必ず下女を見ざるはなく、六ヶ月若くは一ヶ年の期限を定めて其の家庭に使役せられ常に炊事に服し、二人三人の家婢を使役せる家庭には或は御飯炊と称せられ小間使と呼ばれ其の服務に種類あれと雖も、兎に角下女の家庭に存するは日本家庭の常態となす²⁾。

こうした〈下女〉という階級を小説のなかに数多く描いたのが、夏目漱石である^{注1}。漱石の作品に〈下女〉がしばしば登場するのは、当時、家事使用人を置く家庭が珍しくなかったことの反映である。裏返せば、漱石が好んで描いたのは、家事使用人を雇うことが可能な「中等社会」の人びとたちの物語であった。

「文学作品は第一級の歴史・民俗資料³⁾」という指摘があるように、小説は自由な想像力を駆使して時代と社会を生き生きと描き出す。裏返せば、小説もまた社会状況の産物にすぎず、それを生み出した時代と切り離して考えることはできない、ということだ。

筆者はこの数年、女中が登場する小説を通して、日本の家庭や家族、そして社会について考える研究をおこなっている。本稿では、夏目漱石の初期の小説を資料にして、明治後期中流家庭における女中像について考えてみたい。

II 小説家・夏目漱石について

1. 夏目漱石の略歴

【幼少期から青年期まで】

漱石の小説をとりあげる前に、その経歴についてふれておこう。夏目漱石(本名・金之助)は1867(慶応3)年2月、江戸牛込馬場下横町(現・東京都新宿区喜久井町)に、父・夏目小兵衛直克の五男(六人兄弟の末っ子)として生まれた。時代はまさに幕末の混乱期。その年の11月には徳川慶喜が大政を奉還、翌年には戊辰戦争が起こっている。

夏目家は江戸町奉行支配下の町方名主で、神楽坂から高田馬場幕末まで11ヶ町を治めていた。母・千枝は、娘時代に御殿奉公を勤めた経歴をもつ。両親が高齢(父50歳、母41歳)ということもあり、漱石は生後まもなく里子に、さらに1歳のときに父親の友人であった塩原家に養子に出された。塩原夫妻が離婚したため9歳で生家に戻る。しかし、実父と養父の対立により、夏目家

への復籍は21歳まで遅れた。小学校時代は転校を繰り返すなど、漱石は家庭的に恵まれない幼少時を送った。

1888年(明治21)年、漱石は第一高等中学校本科第一部(文科)に進学した。そこでのちに俳人として「ホトトギス」を主宰する正岡子規と出会い、親交を深めていく。1890(明治23)年には帝国大学(現・東京大学)文科大学英文科に入学。大学では、外人教師と二時間ぶっとおして歴史を論じあったり、頼まれて『方丈記』を英訳するなど、抜群の英語力を発揮したという。

【教師時代の漱石】

1893(明治26)年7月、大学を卒業した漱石は大学院に進み、同年10月からは東京高等師範学校の英語教師になった。大学院を修了した1895(明治28)年、月給80円という外人講師並みの破格の待遇で愛媛県立尋常中学校の英語科教員として松山に赴任する。同年、貴族院書記官長中根重一の長女・鏡子と見合いをし、婚約。翌96年、熊本の第五高等学校に教授として赴任するのを機に結婚した。熊本時代の漱石の月給は100円だったが、建艦費(官吏としての義務拠出金)、実父や姉^{注2}への送金、大学時代の貸費生としての返金などもあって、生活は苦しかったという。

漱石は1900(明治33)年、文部省の第一回給費留学生として、英語研究のため2年間のイギリス留学を命じられた。ロンドンでの生活は快適とはいえなかった。留学費の不足、異国での不自由な暮らし、孤独感などに悩まされ、神経衰弱に陥り、“漱石発狂”との噂が日本に伝わったほどであった。神経衰弱はこの後、たびたび漱石を苦しめることになる。

1902(明治35)年に帰国した漱石は、翌年4月に第一高等学校英語科講師の職に就く。同時に東京帝国大学英文科の講師も兼任した。年俸は一高と帝大をあわせて1500円。現在の貨幣価値に換算すると1500万円ほどである。夏には神経衰弱が再発、妻・鏡子と一時的に別居した。

【教壇から文壇へ】

そのような中、子規亡きあと「ホトトギス」を主宰していた高浜虚子にすすめられて書いたのが、『吾輩は猫である』(1905年)である。猫の視点から明治の知識人の生活をユーモラスに描いた小説は、当時の読書界で人気を呼んだ^{注3}。その後、『倫敦塔』『坊っちゃん』などの話題作を次々と発表し、漱石は人気作家としての地位を固めていく。

1907(明治40)年2月、朝日新聞社から招聘の話が舞い込む。日清・日露戦争の時期に、「朝日新聞」は発行部数を大きく伸ばした。が、国家的イベントだった戦争が終わると、発行部数は落ち込み、対策が必要になった。起死回生の目玉商品として白羽の矢が立ったのが、当時、東京帝国大学講師にして小説家の夏目漱石だった。読者マーケットを商人階級から中産階級に移そうとしていた「朝日新聞」にとって、漱石の知的なイメージは、戦略にぴったりだったのである⁴⁾。

作家として立つことを考えていた漱石にとっても、専属作家の話は魅力的なものであった。当時としては破格の月給200円で、他に賞与二回^{注4}。社へ顔を出すのは月二回、新聞連載が始まると欠勤してもよい。小説はすべて「朝日新聞」に連載するが、単行本としては自由に刊行してもよい。論説的な文章はどこに発表してもかまわない、という好条件である。翌3月には朝日新聞社への入社が決まり、漱石は近々教授となるはずだった東京帝国大学へ辞表を届け、一切の教職から退いた。

【専業作家として】

東京帝国大学講師のポストを捨てて作家となった漱石の行為は、当時、世間の評判となった。1907(明治40)年5月3日付「東京朝日新聞」に掲載された「入社の際」には、漱石の並々なら

ぬ意気込みが表れている。その一部を引用しておこう。

大学を辞して朝日新聞に這入ったら逢う人が皆驚いた顔をして居る。中には何故だと聞くものがある。大英断と褒めるものがある。大学をやめて新聞屋になる事が左程に不思議な現象とは思わなかった。…(中略)…新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である。商売でなければ、教授や博士になりたがる必要はなかるう。月俸を上げてもらう必要はなかるう。勅任官になる必要はなかるう。新聞が商売であるが如く大学も商売である。新聞が下卑た商売であれば大学も下卑た商売である。只個人として営業しているのと、御上で御営業になるのとの差だけである⁵⁾。

入社第一作となる『虞美人草』は同年6月23日から10月29日まで、127回にわたり連載された。絢爛たる美文が大きな反響を呼び、“虞美人草浴衣”や“虞美人草指輪”が売り出されるほどだったという。

専業作家となって間もない頃の漱石は、1日に原稿用紙17枚から20枚を書いた。が、1910(明治43)年には胃潰瘍を患い、療養生活を余儀なくされる。転地療養先の修善寺温泉で、大量に吐血して一時は危篤状態に陥った。奇跡的に回復したものの、漱石はその後もたびたび胃潰瘍などの病気に苦しむことになる。執筆も、1日に原稿用紙8枚分とペースダウンした。漱石は晩年、執筆生活について、次のように語っている。

「執筆する時間は別にきまりが無い。朝の事もあるし、午後や晩のこともある。新聞の小説は毎日一回ずつ書く。書き溜めて置くと、どうもよく出来ぬ。矢張一日一回で筆を止めて、後は明日まで頭を休めて置いた方が、よく出来そうに思ふ。一気呵成と云うやうな書き方はしない。一回書くのに大抵三、四時間もかかる。然し時に依ると、朝から夜までかかって、それでも一回の出来上がらぬ事もある⁶⁾」。苦しみながらも毎日コツコツと執筆を続け、几帳面に原稿を渡す、漱石の誠実な仕事ぶりが伝わってくる。

1914(大正3)年、漱石は4度目の胃潰瘍に倒れた。病臥するも約1カ月で復帰するも、糖尿病によるリュウマチの痛みにも苦しむなど、健康状態はすぐれなかった。病を押して1916(大正5)年には新たな小説の連載を始めた。しかし、病状は次第に悪化。1916(大正5)年12月9日、胃潰瘍が原因と見られる内出血により、漱石は49歳の生涯を閉じた。連載中の『明暗』は188回で絶筆、未完に終わったのである。

2. 漱石が活躍した時代

表1は、夏目漱石の主要作品を、小説・小品を中心に時系列に示したものである^{註5}。漱石が小説家として活躍したのは、1905(明治38)年から1916(大正5)年まで。その10年余りの間に、20以上の小説・小品を発表した。

明治期の日本は、「西欧列強に追いつき追い越せ」という合い言葉のもと、ドラマティックな成功をみた近代化の創世記である。躍進の時代、国民の一人ひとりが立身出世主義の上昇気流にのり、国家の発展と自らの成長を重ねあわせることができた。しかし、日露戦争をピークとして、人びとの高揚感は急速に冷える。戦争賠償金を手にすることができなかった日本は、急激な不況に陥った。

夏目漱石の小説にみる女中像

表1 夏目漱石の主要作品（小説・小品を中心に）

作品名	掲載誌（紙）	掲載（連載）年月
吾輩は猫である	ホトトギス	1905（明治38）年1月～1906（明治39）年8月〔断続連載〕
倫敦塔	帝国文学	1905（明治38）年1月
カーライル博物館	學燈	1905（明治38）年1月
幻影の盾	ホトトギス	1905（明治38）年4月
琴のそら音	七人	1905（明治38）年7月
一夜	中央公論	1905（明治38）年7月
薙露行	中央公論	1905（明治38）年11月
趣味の遺伝	帝国文学	1906（明治39）年1月
坊っちゃん	ホトトギス	1906（明治39）年4月
草枕	新小説	1906（明治39）年9月
二百十日	中央公論	1906（明治39）年9月
野分	ホトトギス	1907（明治40）年1月
虞美人草	朝日新聞	1907（明治40）年6月～10月
坑夫	朝日新聞	1908（明治41）年1月～4月
文鳥	朝日新聞	1908（明治41）年6月
夢十夜	朝日新聞	1908（明治41）年7月
三四郎	朝日新聞	1908（明治41）年9月～12月
永日小品	朝日新聞	1909（明治42）年1月～3月
それから	朝日新聞	1909（明治42）年6月～10月
満韓ところどころ	朝日新聞	1909（明治42）年10月～12月
門	朝日新聞	1910（明治43）年3～6月
思ひ出すこと	朝日新聞	1910（明治43）年10年～1911（明治44）年4月
彼岸過迄	朝日新聞	1912（明治45）年1月～4月
行人	朝日新聞	1912（大正元）年12月～1913（大正2）年4月〔中断〕
	朝日新聞	1913（大正2）年9月〔再開〕～11月
心（こころ）	朝日新聞	1914（大正3）年4月～8月
硝子戸の中	朝日新聞	1915（大正4）年1月～2月
道草	朝日新聞	1915（大正4）年6月～9月
明暗	朝日新聞	1916（大正5）年5月～12月〔未完〕

出所)『漱石全集』第27巻, 岩波書店, 275-686頁, 1997より作成

夏目漱石が小説家としてデビューしたのは、日露戦争中の1898（明治38）年。専業作家として本格的に活躍したのは、日露戦争後の反動の時代である。折からの戦後不況により、人びとの目に映じたものは、貧富の差の拡大であり、金権万能の世相であり、モラルの揺らぎであった。

漱石の小説の主人公は、そのほとんどが大学教育を受けたいいわゆるインテリであり、職業も会社員、中等学校教師、大学教員といったホワイトカラーが多い。とはいうものの、彼らは必ずしも経済的に豊かなわけではない。たとえば、「朝日新聞」に連載された遺作『明暗』（1916年）の主人公・津田由雄は、東京帝国大学出身の会社員だが、親からの援助なしには成り立たないギリギリの生活を送っている。一方で漱石の小説には、『それから』の主人公・長井代介に代表されるような“高等遊民”がしばしば登場する。高等遊民とは、高等教育を受けながらも、経済的に不自由がないため定職に就かず、読書や趣味の活動に生きている人びとを指す。彼らは、時流の波に乗って要領よく生きていくことができず、立身出世主義など明治特有の風潮に対しても懐疑的、

という点で共通している^{注6}。

明治後期から大正にかけては、新中間層と呼ばれる人びとが増大し、同じ中流でも勝ち組と負け組がはっきり分かれ、超えがたい懸隔を作り出した時代である。経済的な面でも精神的な面においても不安定で、さしたる理想や信念もない中流生活者。そんな人びとの暮らしや気分・感情を、漱石は雑誌や新聞というメディアを通してリアルに描いたのである。

Ⅲ 夏目漱石の小説にみる女中像

筆者が、夏目漱石の小説を取り上げる理由は三つある。第一に、当時、都市部において増大しつつあった新中間層を主人公とする作品を数多く書いているからである。第二は、雑誌や新聞を中心に活躍し、小説を通して当時の世相や人間類型を描き出したからである。第三は、作品のなかに女中がさり気なく登場し、当時の中流家庭の生活ぶりを垣間見ることができるからである。

漱石の小説家としての活動期間は10年余りにすぎないが、初期の作品と晩年の作品とでは文辞・文体、作風などが大きく異なる。そこで本章では、初期の代表作である『吾輩は猫である』(1905年)と『坊っちゃん』(1906年)の2作品を取り上げ、そこに描かれた女中像について見ていく。

1. 『吾輩は猫である』にみる女中像

『吾輩は猫である』は、当時高浜虚子が率いる雑誌「ホトトギス」に、1905(明治38)年1月号から翌1906年8月号まで、断続的に10回にわたり連載された長編小説である。

イギリス留学中から強度の神経衰弱に悩まされていた漱石は、1904(明治37)年春から夏にかけて回復のきざしを見せ始める。その頃、どこからともなく生まれたばかりの小猫が、漱石宅に迷い込んできた。猫嫌いだった妻の鏡子はこの小猫をつまみ出すのだが、何度追い出してもまた家に入ってくる。見かねた漱石が、「そんなに入ってくるんならおいてやったらいじゃないか。」と声をかけて、小猫は漱石宅で飼われることになった。その猫をモデルにして書かれたのが、この作品である。

『吾輩は猫である』は高浜虚子に勧められ、彼の主宰する文章会(山会)^{注7}で発表するために書き始めたものである。当初、タイトルは『猫伝』とするつもりだった。が、虚子が書き出しの「吾輩は猫である。名前はまだ無い」の一節から取って『吾輩は猫である』に決まった。一回限りの短篇の予定だった『吾輩は猫である』は、好評を得て連載化された。猫に仮託して作者の人生観や文明批評をユーモラスに描いたこの作品は、小説家・漱石の名前を世間に広めることになった。

主人公は「吾輩」という一人称を語って登場する無名の猫。小説の冒頭で、「吾輩」は生まれて最初に出会った人間について、次のように述べている。「ここではじめて人間というのを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々をつかまえて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段に恐ろしいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何かフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう(傍点引用者)⁷⁾」。

こんにちの大学生を「書生」と称した明治期、書生は時代のエリートと考えられていた^{注8}。と

ころが、「吾輩」の会った書生は、田舎者のバンカラで、身分といえば居候の玄関番。いわば庭男の下男が座敷へ上がったような、「猥悪な人種」と描かれている。

書生によって笹原に棄てられた「吾輩」は、生き延びるために「竹垣の崩れた穴」からある家に入り込む。書生の次に会った人間が、その家の下女＝おさんである。おさんとの出会いと、「吾輩」がその家の飼猫になった経緯が述べられる。その一部を引用しておこう。

おさんは書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表に抛り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せていた。しかししもじいのと寒いにはどうしても我慢できん。吾輩は投げ出されては這い上がり、這い上がっては投げ出され、何でも同じ事を四、五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんという者はつくづくいやになつた。……（中略）……吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けておの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所に上がってきて困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を捻りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人は余りを聞かぬ人と見えた。下女は悔しそうに吾輩を台所に抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである（傍点引用者）。⁸⁾

「吾輩」とおさんとの因縁の出会いである。おさんとは、江戸時代のおさんどん、つまり炊事や洗濯など下働きの仕事をする女中の俗称で、この作品では「御三」と漢字を使うこともある。引用文に見られるとおり、「吾輩」が生まれて二番目に会った人間である下女も、書生同様に、いやそれ以上に猥悪な人種として描かれている。

「吾輩」の飼い主一家を紹介しておこう。主人は「珍野苦沙弥」という30代の英語教師。生家は江戸名主の家柄で、いわゆる江戸っ子である。あばた顔で口ひげをたくわえている。大の甘党で特にジャムには目がない。酒には弱く猪口2杯で十分である。偏屈な性格で、胃が弱くノイローゼ気味。多趣味だが何もモノにならない。周りからは勉強家と見られ、本人もそのように振る舞うが、実は机に臥して居眠りし「涎を本の上に垂らす」のが毎夜の日課であった。家族は妻と女の子三人（とん子・めん子・すん子）。珍野夫人は背が低く、頭にはハゲがある。英語や小難しいことはほとんど通じず、大ざっぱな性格の持ち主である。

『吾輩は猫である』には、これといった明確なストーリーは存在しない。明治後期中流家庭の生活と、家に入り出すいっふう変わった友人や知人、近隣の猫たちとの近所づきあいのエピソードが、とりとめもなく語られる。

一例として、ある日曜日の珍野夫妻の会話をあげよう。書齋で原稿書きをしている夫のところへ妻が来て、ぴたりと夫の鼻の先に座った。

「今月はちょっと足りませんが……」「足りんはずはない、医者への薬礼は済ましたし、本屋へも先月払ったじゃないか。今月は余らなければならん」と済して抜き取った鼻毛を天下の奇観の如く眺めている。「それでもあなたが御飯を召し上らんで麵麩を御食べになったり、ジャムを御舐めなるものですから」「元来ジャムを幾缶舐めたかい」「今月は八つ入りましたよ」

「八つ？ そんなに舐めた覚えはない」「あなたばかりじゃありません、子供も舐めます」「いくら舐めたって五、六円位なものだ」と主人は平気な顔で鼻毛を一本々々丁寧に原稿紙の上へ植付ける。……（中略）……「ジャムばかりじゃないんです、外に買わなきゃ、ならないものもあります」と妻君は大に不平な気色を両頬に漲らす。「あるかも知れないさ」と主人はまた指を突っ込んでぐいと鼻毛を抜く⁹⁾。

このように珍野家の暮らしぶりは楽ではない。屋根には草が生え、堀は崩れかけ、垣根の向こうにいても客の話が筒抜けになるような家に住んでいる。それにもかかわらず、住み込みの下女を置いているのである。

『吾輩は猫である』において女中は、どのように描かれているのであろうか。たとえば、「吾輩」が台所で人目を盗んで間食（盗み食い）をすることについて、「何もわれら猫族に限った事ではない。うちの御三などはよく細君の留守に餅菓子などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している¹⁰⁾」と告発する。また、就寝中の下女が歯軋りについては、「この下女は人から歯軋りをするといわれるといつでもこれを否定する女である。私は生まれてから今日まで歯軋りをした覚えは御座いませんと強情を張って決して直しまししょうとも御気の毒で御座いますともいわず、ただそんなことは御座いませんと主張する。なるほど寐ていてする芸だから覚えはないに違いない。しかし事実は覚えなくても存在する事があるから困る（傍点引用者¹¹⁾」と批判する。

『吾輩は猫である』では、すべての登場人物は風刺の対象になるが、なかでも下女はどうしようもない俗物として描かれる。猫である「吾輩」に対して偉そうな態度をとっているが、無知無識でがさつ。デリカシーのかけらもなく、人が見ていなければ平気で盗み食いをするような人物なのである。

こうした女中像は、当時の家政書などでしばしば取り上げられた「僕婢の使役」などにも共通して見られるものである。たとえば、明治を代表する教育者のひとり下田歌子は、女中を「多くは大抵、無識なる下等社会に育ちたる者」と位置づけ、常に「仁恕博愛嚴肅幸平」を持って接すべきだと説いた¹²⁾。女中を一段低いものと見る差別的な内容だが、当時の典型的な女中観の一端を示すものといえよう。

2. 『坊っちゃん』にみる女中像

『坊っちゃん』は1906（明治39）年4月の雑誌「ホトトギス」に、『吾輩は猫である』の第10回と同時に掲載された。この小説の面白さは、正直で生一本の主人公の坊っちゃんが、はるばる赴任していった四国の中学校で、あくどいイタズラに遭ったり、陰險な策略に巻き込まれて次々と事件を起こすものの、持ち前の竹を割ったような単純さ・素直さ・率直さで思いのままに行動する、その小気味のいい振る舞いにある。

坊っちゃんは、損得の計算にはめっぽう弱いが、人間にとって何が大切なのかを知っていて行動する。「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている¹³⁾」正義感、喧嘩っばやさ、江戸っ子のべらんめい調の軽みと勇み足。これらが多くの読者に親しみを与え、さわやかな、心を洗い流されるような感動を呼び起こす。翌1907（明治40）年に単行本化された『坊っちゃん』は、以来ひろく愛読され、中学校の国語の教科書に採用されるなど、日本近代文学の作品中で最も多くの読者を持つ希有の小説となった。

『坊っちゃん』には、「十年來召し使っている清と云ふ下女¹⁴⁾」が登場する。清はもと由緒のあるもので、瓦解のときに零落して、ついには奉公までするようになったのだという。幕府瓦解前の由緒あるものとは、一般に旗本クラスをさす。今でこそ下女として他家に仕える身分だが、清はかつては女中を大勢使う相当な家の出身だったらしい。

11章から成るこの物語は、清が亡くなってからまもなく、主人公「おれ」がみずからの半生をふり返る形で進行する。『坊っちゃん』の作中間期は、1905（明治38）年夏過ぎから日露戦争祝勝会を経て、翌年2月の清の死後、作品発表の1906（明治39）年4月までであると仮定すれば、「おれ」の回想は3月ごろと思われる。清の死の悲しみがまだ消えぬうちに、「おれ」は語り始めたのである¹⁵⁾。

「おれ」と清との関係について見ていこう。幼少年期、「おれ」は親からも町内の人からも疎んじられる存在であった。父からは「こいつはどうせ碌なものにはならない¹⁶⁾」と言われ、母は兄ばかりを最優先していた。ある時兄と喧嘩して傷つけ、父親は「おれ」を勘当すると言い出した。その時、泣きながらおやじに詫まってくれたのが清だった。清だけが「おれ」を可愛がってくれたのである。

母親が亡くなってからは、清の「おれ」に対する愛情はエスカレートした。自分の小遣いで金鍔や紅梅焼を買ってくれ、寒い夜などは枕元に蕎麦湯を持って来てくれ、時には鍋焼饅頭さえ買ってくれた。靴足袋、鉛筆、帳面、さらには小遣いまでくれたこともある。このときのエピソードについて、「おれ」は次のように語っている。

ずっと後のことであるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せといった訳ではない。向て部屋へ持って来て御小遣がなくて御困りでしょうか、御使いなさいとって呉れたんだ。おれは無論入らないといったが、是非使えというから、借りて置いた。実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇へ入れたなり便所へ行ったら、すぼりと後架の中へ落としてしまった。仕方がないから、のそのそ出て来て実はこれこれだと清に話したところが、清は早速他家の棒を捜して来て、取ってあげますといった。しばらくすると井戸端でざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐を引き懸けるたのを水で洗っていた。それから口をあけて壺円札を改めたら茶色になって模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしょうと出した。ちょっとかいで見て臭いやといったら、それじゃ御出しなさい、取り換えて来てあげますからと、どこでどう胡魔化したか札の代わりに銀貨を三円持って来た。この三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよといったぎり、返さない。今となっては十倍にして返してやりたくても返せない。¹⁷⁾

母親が亡くなってから6年目の正月に父親が脳卒中で亡くなり、兄は家を売って九州に転勤することになった。中学校を卒業した「おれ」は物理学校に進学し、家を出て下宿する。困ったのは清の行く先である。清には裁判所の書記である甥がいて、これまで何度も一緒に住もうと誘われていた。しかし清は、たとえ下女奉公はしても年来住み馴れた家のほうがいいと言って応じなかった。清は、十何年いた家が人手に渡ることの残念がったが、「あなたが御うちを持って、奥様を御貴いになるまでは、仕方がないから、甥の厄介になりましょう」と決心し、甥の家に引き取られていく。

3年後、物理学校を卒業した「おれ」は、月給40円で四国の中学校に就職が決まった。報告するため清を訪ねたところ、「坊っちゃん何時家を御持ちなさいます」と聞く。田舎へ行くんだと言ったら、清は非常に失望した様子。「おれ」は気の毒になって「行く事は行くがじきに帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰めた。出立の日、清は朝から「おれ」の世話を焼き、駅まで見送りに来てくれた。プラットフォームでの別れの場面から、その一部を引用しておこう。

車へ乗り込んだおれの顔を昵と見て「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と小さな声でいった。目に涙が一杯たまっている。おれは泣かなかった。しかしもう少して泣く所であった。汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた¹⁸⁾。

別れの場面を描いた小説は多いが、『坊っちゃん』のこの一節は傑出している。生きては会えないかもしれないという覚悟、そして悲しみのため、清の姿が「小さく見えた」のである。しかし、わずか1カ月後——。「おれ」は四国の中学を辞職し、逃げるように東京へ戻ってくる。「清の事を話すのを忘れていた¹⁹⁾」とさながら余談のように語り出すものの、じつのところ四国にいる間も、「どうしても早く東京に帰って清と一所になるに限る」とか「どう考えても清と一所じゃなくちゃ駄目だ」と考えていたという。

清との再会を「おれ」は次のようにふり返る。「おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞆を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰ってきて下さったと涙をばたばた落とした。おれも余り嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだといった²⁰⁾」。

「おれ」はその後、東京市街鉄道の技手として再就職した。月給は25円で教師時代に比べると15円も安い。清も甥の家を出て坊っちゃんと、家賃6円の家を借りて同居することになった。清が理想とする玄関つきの家ではなかったが、清は満足していたという。しかし、幸福な生活は長くは続かない。同居わずか数ヶ月後、清は肺炎で亡くなってしまう。「清が死んだら、坊っちゃんの御寺に埋めて下さい。御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っております²¹⁾」。これが清の「オレ」に遺した最後の言葉であった。

主人公・坊っちゃんと下女・清との関係は、近代的な雇用関係ではなく、封建的な主従関係である。

1898(明治31)年に施行された明治民法では、それまで家の一員として認められていた奉公人を家族から除外し、法制度のうえでは、奉公人は契約にもとづく近代的な雇用へと切り換えられた。しかし、法律が新しくなったからといって、人びとの考え方がただちに変わるわけではない。奉公人を準家族と位置づけて、家族的に扱う意識や慣習は残った。また、奉公人のほうも、主人に忠実に仕えることは、一生を通して自分の能力をかけるにふさわしい仕事と考えた。もっとも、雇う側も雇われる側もそれを“封建的”と見る向きはあまりなかったようである。

『坊っちゃん』における「おれ」の中学校赴任を1905(明治38)年とすれば、清が「おれ」の家にいた期間とは、1880年代半ばか1890年代初頭から、「おれ」の父親が亡くなった1902(明治35)年まで。そして「おれ」が四国の中学校を辞めて戻ってきた1905(明治38)年秋から清の亡くなる1906(明治39)年初めにかけてということになる。すなわち、『坊っちゃん』の清は、明治

民法施行前の女中像として描かれている。

清きよのような奉公人は当時、フィクションの世界にのみ残存するものではなかった。たとえば、1909（明治42）年、雑誌「婦人世界」は「女中欄」を開設し、「感心なる女中の実例」や「感服したる主人の実例」の投書を募った。「十年以上勤続せる女中の実例」を懸賞募集する企画を立て、寄せられた百余通のなかには、勤続年数が35年、47年、54年など予想をはるかに超えるケースが見られた¹⁹。いずれにも共通しているのは、二代、三代にわたって仕えてきたことを誇りに思いつつ、主家の恩を忘れず、主従の別を正していることである。

主家の子どもの関係についての記事から、一例を紹介しよう。先代から53年にわたり主家に仕えてきた老女中は、「坊ちゃまは、御壮健で御勉強なされ、ついには大学を卒へて、立派なお医者様におなりになりました。私は、この時ほど嬉しく思ったことはありません」とふり返る。そして、「私がこの年まで、たいした間違いもなくご奉公することができましたのは、私の功ではなく、まったくご主人様がお情け深くて、よくお使いいただきましたからでございます²⁰」と感謝の気持ちを述べている。一方、主家のほうも女中を家族同様に見なし、老いて十分な働きができなくなったのちも、隠居所を建てて住ませるなどして女中の面倒をみた。

『坊っちゃん』に描かれた温情的な主従関係は、明治末の日本においては、“美風”としてとらえられたのである。

IV むすびにかえて

『吾輩は猫である』の獰悪なおさん、『坊っちゃん』の旨愛する清。両者は正反対の下女を描いているように見える。しかし、いずれもこの時代の典型的な女中像であり、「無知・無教養な存在」という点では共通している。

『吾輩は猫である』の主人公の猫の飼い主も『坊っちゃん』の主人公も、高学歴とはいえ、どう見ても裕福とはいえな俸給生活者である。そんな家庭に住み込みの女中が使われ、読者がそれを不思議とも思わずに受け止めていたのは、とりもおさず当時、家事雑用に立ち働く女中の姿が日常ありふれた情景であったことを示すものであろう。

明治とは身分の違いが存在し、貧富の差が甚だしかった時代である。口減らしのために年端もいかぬ我が子を奉公に出さねば暮らしの成り立たぬ人びとが大勢いた。そのため、人件費は極端に安かった。たとえば、1908（明治41）年の大卒初任給は、官吏（高等官）が50円、銀行員が35円だった。これに対して、女中の給金は1円50銭からせいぜい4円までである²¹。女中の給金が主人の給与に対して極端に安かったからこそ、サラリーマン家庭でも容易に女中を雇うことができた。そして、夏目漱石は、こうした社会状況を押さえたうえで、リアリティある物語を作り上げていったのである。

小説に描かれた世界は事実ではない。しかしながら、フィクションであるからこそ、“社会を映し出す鏡”として、真実を伝える力を持つ。すでに述べたとおり、女中が登場する漱石の小説は非常に多い。今後は、日露戦争後の不況期に発表された作品もとりあげて、漱石文学にみる女中像について探っていきたい、と考えている。

【脚注】

- 注1 明治の文学作品をみても、明治期には〈下女（げじょ）〉〈下女（おんな）〉〈下婢（かひ）〉〈下婢（げじょ）〉が多い。他人の家に住み込んで家事雑用に働く女性にひろく〈女中〉という言葉が充てるようになったのは、大正期以降のことである。
- 注2 漱石の母は後妻で、亡くなった先妻には二人の娘がいた。ここでは2番目の姉ふさを指す。
- 注3 当時の狭い読書界の中で大変な話題になったという意味である。「猫」という言葉が、『吾輩は猫である』と関連づけて、記号論的な価値を持ったのである。
- 注4 荒正人著、小田切秀雄監修『増補改訂 漱石研究年表』集英社、437頁、1984によれば、朝日新聞主筆・池辺三山の月給が当時170円。漱石の月給200円は破格の待遇といえよう。
- 注5 漱石の活字になった作品は、小説のみならず評論や談話、講演録など多岐にわたる。ここでは小説・小品を中心に随筆・紀行文の一部を取りあげた。
- 注6 『吾輩は猫である』の迷亭、『虞美人草』の甲野飲吾、『三四郎』の廣田先生、『虞美人草』の松本や須長、『ころ』の先生なども高等遊民に含まれる。
- 注7 「山会」とは「文章に山がなければならぬ」という正岡子規の主張から付けられた文学研究会の名称である。
- 注8 坪内逍遙『当世書生気質』（1885-86年）には、明治初年の書生の生態が描かれている。
- 注9 『婦人世界』1910年8月号には、「その後、50年勤続、30年勤続の女中の実例が次々と出てまひりまして、二等当選者の発表がしだいに遅れて約半年の後になりましたことは、何とも申し訳ございません」というお詫びの文章が掲載されている。

【引用文献】

- 1) 清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社、33頁、2004
- 2) 横山源之助「工女と下女との比較」、『天地人』第3号、1898
- 3) 上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新聞社、285頁、2000
- 4) 石原千秋『漱石はどう読まれてきたか』新潮社、22頁、2010
- 5) 『東京朝日新聞』1906年5月3日付
- 6) 談話（文士の生活）、『大阪朝日新聞』1914年3月22日付（『漱石全集』第27巻、岩波書店、429-430頁、1996）
- 7) 『漱石全集』第1巻、岩波書店、3頁、1993
- 8) 『漱石全集』第1巻、岩波書店、5-6頁、1993
- 9) 『漱石全集』第1巻、岩波書店、89-90頁、1993
- 10) 『漱石全集』第1巻、岩波書店、28頁、1993
- 11) 『漱石全集』第1巻、岩波書店、186頁、1993
- 12) 下田歌子『婦女家庭訓』博文館、218-236頁、189頁、1898
- 13) 『漱石全集』第2巻、岩波書店、249頁、1994
- 14) 『漱石全集』第2巻、岩波書店、252頁、1994
- 15) 平岡敏夫「『坊っちゃん』は佐幕小説」『文藝春秋』82巻16号、2004
- 16) 『漱石全集』第2巻、岩波書店、251頁、1994
- 17) 『漱石全集』第2巻、岩波書店、253-254頁、1994
- 18) 『漱石全集』第2巻、岩波書店、260-261頁、1994
- 19) 『漱石全集』第2巻、岩波書店、399頁、1994
- 20) 『漱石全集』第2巻、岩波書店、400頁、1994
- 21) 同上
- 22) 「五十三年間独身にて主家に仕へたる女中」『婦人世界』第5巻第2号、1910

- 23) 清水美知子「近代日本における〈主婦〉イメージの形成」、『家族研究』Vol.3, (財)兵庫県長寿社会研究機構家庭問題研究所, 2000

【主要参考文献】

- ・小田切進編『新潮日本文学アルバム2 夏目漱石』新潮社, 1983
- ・夏目鏡子述・松岡譲筆録『漱石の思い出』文藝春秋(文春文庫), 1994
- ・『漱石全集』第27巻, 岩波書店, 2000
- ・平岡敏夫・山形和美・影山恒夫編『夏目漱石事典』勉誠出版, 2000
- ・新宿区地域文化部文化観光国際課『漱石山房の思い出』2011
- ・新宿区地域文化部文化観光国際課『漱石山房春秋～漱石をめぐる人々』2011

